

第6回ZOOM寺子屋「感想」

1	<p>内容の濃いお話をありがとうございました。言語はアイデンティティだからこそ、自分の言葉で語り（書き）、自分と異なる価値観の意見を聞く（読む）、リテラシー教育が重要なのだと、再確認しました。</p> <p>対話のワークショップも実践していきたいと思います。</p> <p>また、お話をうかがったり、あるいは連携していける場があると嬉しいです。今後ともどうぞよろしくをお願いします。</p>
2	<p>今日のレクチャーでは市民性とは、市民性を備えることの重要性についても深く考えさせられました。生徒の指導についてばかり考えて聞いておりましたが、最後の質疑応答で、自分自身の市民性を問う質問がありました。自分自身はどうか、はたと考えてしまいました。また、バイデルスバッハ・コンセンサスという考え方にはじめて触れました。ぜひ実践してみたいと思います。ありがとうございました。</p>
3	<p>貴重な講義を拝聴でき、ありがとうございました。「評価」が難しいという点について考えてみました。テーマの回答？議論？を評価するのは、名嶋先生が仰る「包摂」という観点から少しずれてしまい確かに難しいと考えました。ですから、日本語教育の上では「批判的思考」を評価するのではなく「批判的思考」を持って意見する言語活動での「語彙や表現（文法）が適切に使用できるか」を評価することに焦点を合わせればいいのではないかと考えました。まずは、その視点で教室活動を考えてみたいと思いました。「批判的思考」は私をはじめ日本人に大きく足りない要素なので学生とともに学びたいと思います。ありがとうございました。</p>
4	<p>とてもたくさんのお話をギュギュギュッと詰め込んで伝えてくださって、ありがとうございます。全てを消化するには学びなおしも必要ですが、先生のお話の流れが「異なる」ということがあってこそそのまとまりの中で、互いを尊重をするそういう形の「共に生きる人のまとまり」→その中で発揮されていく「関わりを深くするためのツール」としての言葉の対話→そこから育てあげられていく市民性とつき組み上がっていくところにも、習いながらとても楽しみを覚えました。</p> <p>学びというものが俯瞰してみられる全体像の中での姿を常にイメージする力が教師に求められていて、本当にクリエイティブでワクワクする仕事でラッキーだなという気持ちがさらに強まりました。</p> <p>最後の質問。私自身の教師としての学びのあり方の示唆、ありがとうございます。そして、そのさきは日本語教育を飛び出して、社会の一員であるなかなか上手な対話を教育されてこなかった世代の私たち日本人(もちろんそうではない方もたくさんいらっしゃると思いますが)の一人として「今、これから」に向き合い、「共に学ぶ」を教室の外にも広げて、多様性のある対話が多数派側に浸透して変わっていくそんな日本社会の一端を作りながら、周囲に変化を促しながら、安心して身を置いていられるそんな日々を実践していきたいなと思いました。</p> <p>そのために「私たち」として学び続けたいなとも。</p> <p>末尾になりましたが、素敵なお時間をありがとうございました。またいつかお目にかかれる日を楽しみにしております。</p>
5	<p>本日は大変貴重なお話をありがとうございました。2019年の3月に、早稲田大学で李先生がコーディネーターなされた「政治教育、平和教育を日本語教育実践へ」といったタイトルの研究会に、私も参加していました。名嶋先生もお話しされていたことよく覚えています。実は、民主的シチズンシップの考え方について伺ったのは、その時が初めてだったからです。しかし、その時は私にはまだまだお考えを深く理解できる知識がなく・・・その後、福島先生に学んだりしていました。そのような時に先生の「民主的シチズンシップの育て方」が発売され、すぐに手にとりました。現在、大学院で、「ことばの教育」である日本語教育の専門家としての視点から地域社会に関わる意義を考えています。本日は、以前よりずっと、先生のお話を自分の問題として捉えることができました。「まち」の中で、「個」として住民が関わり合うことの重要性を意識しながら、実践をデザインしていきたいと考えております。もう少し考え続け、また先生にご意見を伺えたら幸せに存じます。どうぞよろしくお願いたします。</p>

6	<p>大変有意義な時間をありがとうございました。たくさんの気づきを頂きました。中国人学習者の単一になりがちな価値観に対して、民主主義代表のような顔をして、色々な情報やテーマを与え続けていましたが、もしかしたら圧倒していたのではないかと、彼ら自身の考える力を引き出していたのか、そして私自身考えることを続けていたのか、考えさせられました。自分の興味ある世界にはものすごく深く、それ以外にはコミットメントしたがるに彼らに忸怩たるものを感じていましたが、改めて考えると国籍の差ではなく若者の特徴かもしれません。</p> <p>今後はポイテルス バッハ コンセンサス」を念頭に「どうして？」を引き出して行こうと思います。そしてそれは設問次第で初級レベルから始められると思っています。先生の著作を参考にさせて頂き、教室活動をもっと深いものにして行きたいです。先生のおっしゃった「すぐには変わらない」ということも忘れず、長期的な視野を持って取り組んで行ければと思います。</p>
7	<p>研修直後の21時から日本語のレッスン（オンライン）があり、早速、「学習者の方自身の利害関心の重視」を意識して授業を進めることを実践しました！レッスン後にいつもと違う達成感がありました。これが大事だと頭ではわかっている、つい文型説明や練習に時間を割いてしまいがちになっていたと反省しました。</p> <p>また、「価値としての複言語」「自分の中に複数のアイデンティをもつ」という視点に興味を持ちました。これからも様々な日本語学習者の方々とであうなかで、「日本語でこんな話もできるかな？」と、新たなレッスンの切り口？が思い浮かびました。</p> <p>大変、勉強になりました。ありがとうございました！！</p>
8	<p>ご講義くださった名嶋先生、寺子屋を開いてくださった嶋田先生、どうもありがとうございました。</p> <p>日本語教師は言語教育だけでなく、学習者が自分の人生をデザインしたり、日本社会で生きていくための力を支援する役割が求められると改めて思いました。具体的には、教室においては単なる知識の提供ではなく、学習者が自ら考えるための場づくりや授業展開を心がけたいと思いました。</p> <p>そして、同時に多数派である日本社会への橋渡しや調整役のような役割も担えるのではないかと思いました。今後の自分の仕事「介護人材の育成」のためのヒントや気づきを得ることができました。どうもありがとうございました。</p>
9	<p>今回はとても興味深いお話を聞かせていただきありがとうございました。</p> <p>お話を伺って、まず自分自身が普段接している学習者を同じ市民だとちゃんと見ていたのだろうか？と感じました。「多数派の日本人側が変わらなければ社会は変わらない」というお言葉、とても重く受け止めました。まず自分自身の市民性を育てていきたいと思えます。そして、今の自分の能力を受け止めさらけ出した上で、学習者や自分の家族や周りの人と一緒に市民性を育てていきたいなと思いました。</p>
10	<p>言語教育が持つ潜在力（ポテンシャル）の話の中で、「これまでの日本語教師としての活動を、改めて民主的シティズンシップの実践として捉え直した時、すぐに大きくできることは変わらなくても、目標が変わり、実践の質が深まる。」と言われたこと。</p> <p>そう思います。そう思ってやってきました。何という大きな励みですか。と同時に、それを共有できる場が、まだまだ、日本語教育の現場には少ない、小さい場では無いことを痛感します。どうすれば、それを届けられるかが、自分の課題であり、仕事でもあると考え始めています。それこそ、できることは大きくは変わらなくても。</p> <p>一方、名嶋さんが、マジョリティへの働きかけをご自身の役割と見定められ、日本語教育から離れていっている、と語られたこと、これも考え続けていることですが、改めて明確にテーマ化されたと感じました。</p> <p>右傾化、排外主義が強まる状況への憂慮が深まるばかりです。その点も、状況論として冒頭に明確に整理されました。以前、私は、被差別部落の運動や、施設を脱出し自立した障害者の介護支援、在日の「不法占拠地域」の活動支援など、いろいろな社会活動に関わっていましたが、ずっと前にそこから離脱し、「普通の」会社員となり、実質的には傍観者となりながら、お決まりの過重労働の中で生きてきました。4年前、鬱で退職し、日本語教師という職業と出会う中で、改めて、今の社会状況を、強烈に意識せずにはおれない感じになってきています。</p> <p>日本語教師も、やはり、狭い組織と制度の中で、「ちゃんとやる」同調圧力の中での作業に追い立てられ、いっぱいいっぱいになっている自分の状況を問いつつ日々です。これでいいのか。</p> <p>『民主的シティズンシップの育て方』の読書会が終わってから、と思っていましたが『10代からの批判的思考』を読み始めました。</p> <p>う～ん、道徳か、そこから入るか、って思って読み始めています。</p>

11	<p>貴重な研修の機会を与えていただきましてありがとうございました。にもかかわらず、職場から参加させていただいたために途中で退席することとなり、本当に申し訳ありませんでした。</p> <p>憲法にある国民の権利とは何なのか？国民の中に決して今は入らない外国人納税者はどういう存在なのか・・・と、最近卒業生と話す機会がありました。どれだけ外国人が増えても、あるいは増えれば増えるほど日本人は「国民」とそのほかの人を分けようとするのではないかという疑念を彼は語っていました。名嶋先生からご紹介のあったドイツの教育の在り方は示唆に富んでいると感じました。教育の在り方の重要性はだれしもわかっています。だからこそいつの時代もそれをめぐってせめぎあっているのだということも。</p> <p>日本語学校は授業者の裁量部分が大きいと感じています。個人の考え方や姿勢が問われるとあらためて考えさせていただきました。ありがとうございました。</p>
12	<p>まず、多文化・多言語、複文化・複言語について再度整理ができ、非常に勉強になりました。「多言語・多文化であっても、バラバラである場合もある」というのは、なるほどと思いました。</p> <p>そう考えると、現在日本の多くの大学では国際化が推し進められていますが、「多文化・多言語キャンパスだが、複文化・複言語キャンパスではない」大学がほとんどなのではないかと感じました。</p> <p>「多様性と全体のゆるやかな結束性とは両立する社会」 今後、日本がぜひそこに近づいていければいいなと強く感じます。</p> <p>そのために、私（たち）に何ができるのかと考えたときに、民主主義シティズンシップ教育の要素をどう取り入れていくかだと思いました。</p> <p>ポイテルズバッハコンセンサスの内容が、改めて自分の教育観の軸となる部分を思い出させてくれました。</p> <p>根気強く、取り組んでいきたいと思います。</p> <p>本当にありがとうございました。</p>
13	<p>クラスでも職場の同僚との間でも対話の土壌作りが最も大切だと感じています。ことばの教育を通してこの日本で多様な人々が共に生きることを実現したいと思っています。日本語教師がもっと視野を広げ、他分野の人々とながら活動していくことで実現できるのではと思いました。</p> <p>「批判的」ということばのネガティブな印象に引きずられないような本来の意味にピッタリにことばが見つかるといいなと感じました。</p>
14	<p>本日はありがとうございました。お話を合った「ポイテルズバッハ・コンセンサス」に基づいたドイツの政治教育に大変興味を湧きました。政治教育と言っても政治を仕事と捉え仕事の仕方を教育するというようなものではないところに特に興味を持って拝聴しました。</p> <p>根本的な他者との接し方というか、自分の意見、相手の意見、それぞれ違っているのが当たり前だから、どのように意見を交換し、そして、まとめ、ある1つの方向性、またはこうであるという1つの結論を導き出すということを教育する仕組みであり、また、決まった見方だけでなく、違った見方、考え方がないだろうかと探すというようなことを指して批判的と表現していると考えました。</p> <p>日本では言葉のイメージから批判的の「批判」だけがフォーカスされてしまい自身の考えや意見を言い合うことは相手を批判していると考えられてしまうことが度々あり意見が言いづらと思うことさえあります。</p> <p>著書の「10代からの批判的思考」も拝読しました。批判的思考といった視点を教師が持つことで受け取る学生の意識に変化がある、出るはずだと思いました。自身の授業にどう取り入れていくか検討し実践していきたいと考えています。ありがとうございました。</p>

15	<p>今回、zoom寺子屋に申し込んだときから「激論の末に真理が生まれる」という言葉のことを考えていました。「激論」は真理に向かうために必要なことなのに、どうして日本ではそれをしようとする人がいないのかと疑問を感じたロシアからの留学生が教えてくれた言葉です。</p> <p>「激論」は強く響く言葉なので「そこまでは…」と思う人もいるかと思いますが。でも、この言葉を「対話」に置き換えるのでしょうか。「相手とお互いに真摯に向かい合って対話を重ねることは真理に向かうために欠かせない」はずです。今、ニュースで見る記者会見でもそれが非常に軽んじられていて、これで日本は大丈夫だろうかと思うことがたびたびです。視線を転じて、自分自身の職場では？子どもたちの通う学校では？家庭では？と振り返りました。</p> <p>確かに「この人の考え方、私となんだか似ているな」と感じると、安心した気持ちになるものですが、異なる視点、立場からの異なる考え方を安心して話せる環境では「みんな同じ」というのは却って縛りになるのではないかとも思われ、何でも話せる環境と、そのための言葉遣いを整えることの大切さについて考えずにはいられませんでした。</p> <p>物事を批判的に見ることができれば、異なることを認められる。その上でお互いに関係を作っていくには言葉の使いかたがとても大切です。日常からボイテルスバッハ・コンセンサスを意識したいと思いました。日本語教育に携わる立場からはそのための言葉・表現をしっかりと見つめていきたいと思いました。</p>
16	<p>インド社会において、日本語教育を通してどのような人を育てることができるのかについて言及いただき、ありがとうございます。いまだに私の頭の中にいろいろなことが渦巻いていて、まとまっていません。先生がおっしゃった「共に生きる」という精神（日本人も外国人も）を養うことの必要性を強く感じています。インド人の日本語教育では、日本社会に摩擦なく、前向きになじんでいけるよう、できるだけ情報や考え方を学習者と共有するように努力しています。直近のことでは、特に技能実習生のことを考えるとき、日本側の受け入れ先が「共に生きる」という考え方の軸を持ったところであってほしいと切に願い、それを実現すべく奔走しています。いかに日本人の外国人に対する意識を変革していけるのか、非常に大きな課題です。しかし、少しずつでも前に進まなければならないことでもあります。名嶋先生のセミナーで、日本語教育との結びつきを確認させていただきました。ありがとうございました。続編を楽しみにしています。</p>
17	<p>名嶋先生、「地域の日本語支援の現場で、互いに教え合える存在であると意識できる講座とは」にアドバイスをいただきまして、ありがとうございます。1年ほど「わかってもらえない」からと対話をあきらめていました。ボランティアのみなさんがされていることを否定しない、今の活動にプラスしていってもらえる「ともに学んでいくことしかできないようなトピック」を考えたいと思います。聞いてもらう機会作りからはじめます。</p> <p>ボイテルスバッハ・コンセンサスの授業の話を聞いて、数年前テレビ番組で紹介された明星学園のクラスの一コマを思い出しました。「忘れ物をなくすためにどうすべきか」第一言語の手話で静かでにぎやかに議論されていました。民主的シチズンシップ教育、主体的に学ぶ活動なんじゃないかなと思いました。</p> <p>感想は書ききれませんが、まずは普通の授業に「議論」の機会を入れ込んでいきたいと思っています。</p> <p>みなさま、充実した時間をありがとうございました。</p>
18	<p>表現の自由の1つとして、出来事に対する批判的思考を子供の頃から習慣的にもつことで、社会の変化や、世の中のルールなどを当然のことと受け入れてしまわず、自分の意見が言えるよう生きる力を培う大切さについてお話を伺いました。</p> <p>概して日本人は、物事に対して意見を言わない（持たない、無関心な）人の方が多いと思うのですが、その理由の1つが学校教育の中にもあるのだと実感しました。じつは今年、時間講師として高校生に国語を教える機会があり、そこは、スポーツ男子のみのクラスで、一種独特でした。というのも、彼らは何事に対しても批判的なのです。学校のルールに対してはもちろん、教員に対しても気に入らないことがあると攻撃的な態度を取ることがありました。何が良くないのかと考えると、きりがないように思うのですが、一つには、学校組織自体が、そのことをあまり重要視していないように感じました（習慣化しているようでしたから）。</p> <p>私が、そのことを批判的に捉えたとしたら、教員と生徒の間で話し合いをもっと持つことが出来たらよいのではないかと単純なものです。彼らが批判的に物事を捉えることができるのだとしたら、立ち止まって、そのことについて、多くの批判的な意見を出してもらい、その後で建設的に解決の方向へ導くことが出来たのではないかと思います。</p> <p>意見を出し合い、話し合うことの大切さは分かっているものの、方法が分かっているなければ、相手を傷つけたりすることの懸念から、上手く発言できなかつたりするものです。今回の寺子屋での授業を再確認しながら、機会があれば外国人の学生へもアドバイスしたいと思います。</p>

19	<p>お話を聞きながら、特にドイツの学校の様子を聞いているとき、自分のいる社会に対して、今まであまり深く考えてきていなかった自分に恥ずかしくなりました。自分自身で勝手に当たり前だと思っていたり、特に違和感もなく受け流していたり、そのままなんとなく受け止めていたりしたことが多かったと思います。身の回りにあるものや社会で起きている事柄に対して、自分自身に問いかけ、考えることがまずは私の第一歩だと感じています。</p> <p>また、『共に学ぶ』ことを心がけて授業を行っていたつもりでしたが、できていないことも多かったように思います。無意識に持っている教師＝教える立場、という考えからまだまだ脱却できていない気がします。今後はボイテルスバッハ・コンセンサスを意識し、教室活動を組み立てていこうと思います。意識しないでもできるようになるまで、まずは意識的に自分を変えていこうと思います。</p> <p>貴重なお話を伺えて、大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>
20	<p>さまざまな国から学生が集まる日本語学校には、学生が背負ってくるそれぞれの国の文化があります。さらに学生の出身地の文化があり、学生が属する家庭の文化があり、学生個々人の文化があります。その違いを日本語教師は受け入れていかなくてはいけないのだということをあらためて思いました。「わからないこと」を「嫌いだ」と排除するのではなく、「わからないまま」受け入れること、そして、わかろうとする努力、忘れてはいけないことですよね。私は知らず知らずのうちに学生に自分の価値観を押し付けていないだろうか、自分の行動もちょっと立ち止まってじっくり考えてみようと思いました。次回も楽しみです。</p>
21	<p>名嶋先生、貴重なお話を有難うございました。嶋田先生、このような充実した学びの場を作ってください、参加させてください、感謝申し上げますばかりです。</p> <p>心に残る数々のことばをいただき、思考するきっかけをいただきました：</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「ばらばらな私たちを束ねる方法」として、「異なる人たちが集まって社会ができて」「ばらばらなみんながそこにいることで、その社会が存在する」ということを、束ねるための共通認識にしてしまう。「異なっている」ということが基本のアイデンティティ、ということですね。 ●対話をせずに正論を迫るのは全体主義的。民主的な方法でこちらを向いてもらうには「対話」しかない。「対話のための対話」からはじめてよい！（対話教育） ●言語教育と民主的シチズンシップ教育の親和性：「複言語」「コミュニケーション」→多様性の尊重と対話 ●ボイテルスバッハ・コンセンサスを基軸にして、「共に学んでいくことしかできないような仕掛けをつくる」！
22	<p>名嶋先生のお話を聞きながら、私はずっと「対話」をしていました。ありがとうございました。</p>
23	<p>ドイツの小学生たちの授業に臨む様子が興味深く、もっと詳しく知りたいと思いました。</p>